

共生・公正・創造



# 東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

## 【シリーズ6】

何の科学的・論理的根拠もなく、調査一つせず、「JR総連・東労組内部に革マル は一人もいない」と断言していること。

東京地裁「品川車掌区掲示物破損事件」第7回目公判（平成12年10月3日）の場において千葉勝也東労組本部書記長は、反対尋問に立った原告側弁護士との間に、概要以下のようなやりとりを行っている（傍線筆者）。

（＜弁＞は、原告東日本鉄産労側弁護士 ＜千＞は、千葉勝也東労組本部書記長）

＜弁＞革マル派は、一般的に非公然組織と言われているのは知っているか。＜千＞知っている。

＜弁＞それならば、東労組の役員に革マル派がいるかどうか、調べる方法はあるか。＜千＞ない。

＜弁＞証人は、革マル疑惑について「事実無根」と主張しているが、「事実無根」かどうかはわからないではないか。誰が革マル派だか、証人にはわかるのか。＜千＞わからない。

＜弁＞公的機関から、1998年の大会で東労組役員への革マル派の浸透が一段と進んだと指摘されているが、「事実無根」というのなら、どうやって証人らはそれを調べたのか。＜千＞調べていない。調べる必要もない。

＜弁＞公安調査庁の指摘は認めないということか。＜千＞そうだ。

＜弁＞証人らは公安調査庁を相手に、訴訟や告訴手続きは行ったか。＜千＞していない。

＜弁＞何故、公安調査庁に対して、訴訟なり告訴の手続きをとらないのか。＜千＞公安調査庁の見解表明の背景には裏に別の意図がある。だから、裁判所に提訴しても意味がない。

また、当日の最後に行われた被告側再主尋問において、被告東労組側弁護士と千葉書記長との間に次の重大なやりとりがあった。

＜被告側弁護士＞現在の東労組執行部に革マル派はいるか。＜千葉書記長＞いない。断言できる。

が、それにしても「調べる必要を感じず」、「実際に調べず」、「調べる方法がない」状況の中で、「（革マル派は）いない。断言できる」とはよくも言えたものである。

革マル派とJR総連・東労組の共有信念である内ゲバ事件に対する「権力の謀略」論と同じで、これも嘘か真かの問題ではない。「天地がひっくり返っても絶対に認めない」、「認める意思そのものがない」のだから、どうしようもないのである。言ってみれば、「金正日が自白する以前の日本人拉致問題」と同じなのだ。

このように考えれば、「革マル派はいないと思うし、許すわけにも認めるわけにもいかないが、もしいたら分会長に申し出よ」などというおよそ見え透いた、支離滅裂な呼びかけを恥ずかしげもなく行なって、案の定ひとりもいなかったぞ、だからこれで一件落着と判断してなぜ悪い、なにが可笑しいのか、と開き直るかの如き平成12年12月、同13年1月の「JR東労組見解」も、彼らの世界にあっては、きわめて“当たり前の見解”なのである。

そして実力派書記長・千葉勝也氏が、その“見解”を出すほぼ2ヵ月前に法廷で「（革マル派は）いない。断言できる」と証言したJR東労組である以上、「12年12月見解」による一般組合員への呼びかけは、「形式的に行なったアリバイ作りに過ぎなかった」ことは明白だ。

＜JR東日本労政『二十年目の検証』29ページから32ページより抜粋＞

# 民主化の声・声・声・・・

2005.9.29 その6

松崎明のホームページが半年ぶりに更新！

## 東労組本部の逃亡者9名は 戦前回帰への道を猛進！

東労組の前顧問・松崎明のホームページが半年ぶりに更新された。

・・・たたかう労働組合は戦後、松川事件、三鷹事件などを通じて、国家権力による破壊攻撃を受けた。私の尊敬する後藤昌次郎弁護士は松川事件の弁護人としての実感を通じて、「浦和電車区事件は松川事件以上の大弾圧ですよ」と事件直後訴えていた。だが、わがJR東労組本部の逃亡者9名は「弾圧は不当ではない」「彼らはクビですからね」「裁判は長期でも闘い抜くというのは背筋がゾットする」とまでのたまい、みごとに戦前回帰への労働運動への道を猛進しているのである。

まさに「卑怯者、さらば去れ」である。われらは憲法を守る。平和を守る。労働者、そして組合員とその家族の利益を断固として守り抜く。韓国、中国をはじめ、世界の労働者と平和を愛する人々と手を固く握りしめ、闘い抜く。間違った道を再び歩んではならないのである。悪とはたたかわないならば、何も言わないのに等しいのである。世界に平和を！そのための愛と連帯を！（mattsan.netより）

わがJR東労組本部の逃亡者9名とは、たぶん本部役員辞任組・嶋田以下8名と前千葉地本委員長・小林克也のことだろう。確かに彼らは、「（警察の）弾圧は不当ではない」「彼ら（浦和電車区強要事件の被告人）はクビですからね」「（浦和）裁判は長期でも闘い抜くというのは背筋がゾットする」と言ったのは事実である。だからといって、『戦前回帰への労働運動への道を猛進している、卑怯者は去れ』とは言い過ぎであろう。

その張本人、松崎明氏は、緑の風9月15日号によると、8月29日から9月5日、ポーランドに行っていたようだ。ポーランド「連帯」25周年&第2次世界大戦終結60周年記念訪問を、石川委員長ら18名で実施したようである。派遣団は、『ポーランド「連帯」が今では組織数も減り有効な闘いが作り出せないであることを実感し、教訓的視点に立った総括をし東労組の運動に活かしていきたい』とレポートを寄せている。ぜひ、行き詰まった東労組の運動も総括してほしいものだ。

## 内部抗争で明け暮れる東労組に、未来はない！

民主化の声・声・声・・・（続く）